

鳥取県・医療法人 清和会 垣田病院

〒682-0021 鳥取県倉吉市上井 302-1

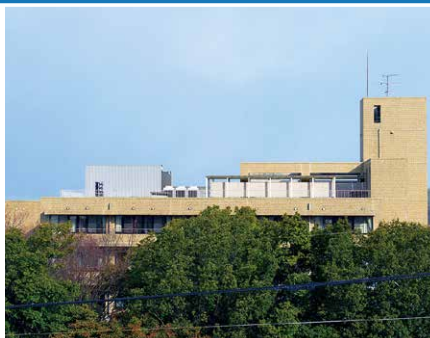
<http://www.kakita-hp.jp/>

●理事長・院長：坂本雅彦

●設立：1961年

●病床数：86床（一般病床80床、地域包括ケア病床6床）

●診療科：内科、循環器内科、呼吸器内科、眼科、整形外科、神経内科



急性期と慢性期治療の両立を目指す地域密着型病院

環境抜群の病院らしからぬ病院

鳥取県倉吉市の医療法人 清和会 垣田病院（坂本雅彦理事長・院長／86床＝一般病床80床、地域包括ケア病床6床）は、内科、循環器内科、呼吸器内科、眼科、整形外科、神経内科の6科を揃えている。糖尿病を中心とした生活習慣病の治療から、合併症としての動脈硬化症疾患、特に虚血性心疾患の急性期治療、また急性期治療後のリハビリテーションと社会復帰という一貫した診断、治療体制を整えている専門病院で、外来患者は1日平均約150人の地域密着型だ。

同院の診療圏は、人口約4万8千人の倉吉市を中心とした鳥取県中部、さらに岡山県最北部の蒜山周辺などの地域だ。診療圏全体の人口は10万人弱というところだが、病院の規模からすればかなり広いエリアをカバーしているといえよう。

同院は昭和36年（1961）、倉吉市内の今とは違う場所に開院した。JR山陰本線倉吉駅から徒歩5分という恵まれた現在の場所に新築移転したのは、昭和54年（1979）のことだ。以来、入院病棟の増改築、改装などを重ね、ハード面における充実を図る

一方、同院が目指す特徴ある医療推進のために診療科を整えるなどして今日に至っている。この間、併設施設として介護老人保健施設「うつぶき」、訪問看護ステーション「せいわ」も開設していて、より立体的な医療を展開してきた。

同院は「病院らしからぬ病院」だ。病院の敷地は鬱蒼とした樹々に囲まれ、玄関からエントランスロビーにいたる空間は、避暑地の保養所のような趣だ。だが、それ以上に進むと想像以上の規模に驚く。特に館内の通路や待合ロビーなどに置かれた観葉植物は院長自身が育てていて、その数と種類の多さに圧倒される。また、壁面には前理事長が集めた美術品が飾られて患者さんの眼を楽しませており、自然とアートで癒される病院を目指している。

患者の生涯を診続ける医療

地域密着型病院の本領を発揮するために「専門が細分化した輪切りでしか診ない医療に対し、一人の患者さんをずっと（生涯）診続けることのできる医療を推進し、地域に選ばれる病院になることを目指しています」と語るのは坂本院長だ。同院が行う医療は急性期医療とかかりつけ医機能の両立が旗印と

なっていて、そのために急性期、慢性期に対応できる機能を有している。

急性期の対応に関しては循環器科が軸となっている。時間との闘いとなる虚血性心疾患の急性期治療に対応するために循環器専門医である坂本院長が常駐している。狭心症、急性心筋梗塞、心不全などの循環器疾患の専門的な診断と治療は地域においても定評のあるところだ。これは鳥取県立中央病院循環器科部長、同病院救命救急センター長などを歴任し、日本循環器学会認定専門医、日本心血管インターベンション

治療専門医でもある坂本院長のキャリアに負うところが多い。

倉吉市周辺の医療機関からの紹介も含めた心臓専用のシネアンギオ装置を用いたカテーテル検査やインターベンション治療による手術症例数は、毎年 600 件前後（内、経皮的冠動脈形成術 = PCI も 100 例以上を実施）と実績を上げている。また、不整脈疾患に対する電気生理学的検査、ペースメーカー植え込みも年間 50 件ほどをこなす。こうした対応については「断らない医療」を旨としていて、365 日 24 時間体



敷地は鬱蒼とした木々に囲まれている。



院内は緑と光と素敵な美術品であふれている。



2階踊り場からの風景



老健とつながる渡り廊下 春になると、山桜が目の前に咲き乱れる。



外来待合室 談話コーナーとしても機能する、ゆったりとした落ち着いた空間だ。



カンファレンスの様子 “チーム医療”というあらたまった認識は不要、スタッフ同士の連携は当たり前



心臓専用のシネアンギオ装置を用いた治療



受付



吹き抜けの下の明るい2階待合室



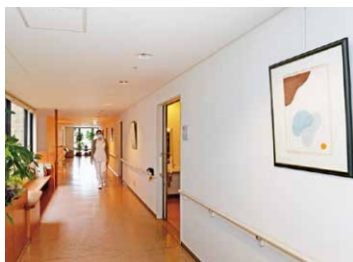
診察室 呼吸器科の山本芳麿副院長



スタッフステーション



リハビリテーション室 ベッドサイドで行う患者も多い。



3階病室



充実した浴室



廊下のベンチ

制を敷いている。

他 科との連携による糖尿病治療

一方、同院に求められるのは、地域医療においてプライマリーケアも含めた慢性期医療の担

い手としての立ち位置だ。「地域住民や地域の医療関係者と共に医療を協働することが大切で、それが医療人としての喜びでもあります。慢性期医療への対応では特に他の医療機関との連携が必要な場面が多いので、そうしたことを実感できます」と語る坂本院長だが、これを実現す

るために同院では様々な工夫を凝らしている。

平成 27 年（2015）に肺、気管支など呼吸器系の病気を取り扱う内科部門として開設した呼吸器内科にも専門医が常駐し、診断、治療を行っている。特にがんの中でも高齢者に最も多い肺がんの早期発見のために、喫煙者への禁煙指導などを含めた予防に力を入れている。同科ではこのほかにも身近な病気としての上気道炎、急性気管支炎、肺炎、気管支喘息などの診断、治療を常時行っている。

同院における慢性期医療の要となっている内

科部門は、一般内科として消化器内視鏡検査、腹部エコー、CT 検査などを行い、通常の診断、診療を行っていることはもちろんだ。さらに、同院が特に力を入れているのは、今や同院の看板ともなっている独自の医療体制としての“仕組み”が構築された糖尿病を中心とした生活習慣病の予防、治療だ。

坂本院長の妻でもあり内科を受け持つ坂本恵理医師は「当院には糖尿病患者にとって必要な科が揃っていて、各科で患者の病状が共有できているので、検査、診断、治療の効率性は高い



クリスマスのごあいさつ 管理栄養士、厨房スタッフと共に（中央が内科の坂本恵理医師）



クリスマス フルコース料理



クリスマス会の一コマ



さあ、勉強しましょう。



理学療法士の指導の下で楽しく運動



野外活動での特製弁当



グラウンドゴルフでの一コマ



冊子「糖尿病を学ぼう」

と思います」と語るが、たしかに一病院で、しかも“顔が見える形”での診療科の連携による診断、治療は、なによりも患者にとってありがたいはずだ。これこそが坂本院長が強調する「一人の患者さんをずっと（生涯）診続けることのできる医療」であり、同院においては糖尿病診療においてより顕著だ。

同院は眼科も有しており、高齢者が罹患しやすい網膜症、白内障などの診断や治療を行っている。また、内科、循環器内科との連携によって糖尿病関連の眼の疾患にも対応している。同院が積極的に取り組む糖尿病治療の中で、眼科への期待値は高い。

同院では主に内科と循環器科および眼科との連携によって糖尿病治療のスキルを高めていることはもちろんだが、その連携のために糖尿病認定看護師（1名）と糖尿病療養指導士（8名）の専門スタッフがいることも大きな特徴だ。糖尿病治療においてポイントとなる食事に関する組み立てには、管理栄養士の存在も欠かせない。

また、平成10年（1998）から毎月欠かさず開催してきた「糖尿病教室」は、患者や患者の家族、地域住民への予防から食事療法に関する啓発活動の一つだが、いまや同院の糖尿病医療の目玉ともなっている。

「糖尿病を楽しく学ぶ」ことをモットーにした糖尿病教室は、旬の食材を使った料理を提供し、食事をしながら糖尿病の勉強をしてもらうことを主眼にしたものだ。現在は、2カ月ごとにテーマを変え（毎月1回中旬に開催する）、医師、管理栄養士、看護師、理学療法士などの多職種がかかわって糖尿病に関する勉強会を行っている。

平成29年度のテーマを列記してみると、「大解剖！あなたの食事大丈夫？」「糖尿病と腎臓の深い関係」「災害発生！！あなたの備えは大丈夫？」「運動療法を楽しもう！！」「栄養表示の見方教えます」など、様々な角度からのアプローチによる勉強会になっている。11月には野外でのレクリエーション（ハイキング、グラウン

ドゴルフなど）、12月には糖尿病患者のためのフランス料理のフルコースを提供している。同院ではこれを200回以上、一度も休むことなく20年近く実施してきた。まさに「言うは易し、行うは難し」を克服した勉強会の継続である。

もう一つの目玉が、糖尿病の教育入院だ。年間約150名の患者を受け入れている。医師、看護師、理学療法士、管理栄養士、薬剤師などがチームで患者教育に取り組む。平均2週間の教育入院中、同院独自のテキストを中心に指導を行う。これによって患者が前向きに治療に参加することになるので、その後の外来治療の流れが良くなるという。糖尿病教室も教育入院もまさに患者の生活習慣に踏み込んだ同院の特色あるアクションプランといえる。

地域医療の質の向上に貢献

こうした医療を進めるにあたって、さらに安全、安心、快適な医療サービスを提供するためには、地域の行政、病医院などとの地域連携も必要になるが、地域住民および病院をはじめとする医療関連機関の拠り所としての役割を果たすことも目指している。

地域全体での医療の質の向上を目的とした同院が主宰する独自の勉強会「白兎勉強会」は、同院の専門分野である循環器や糖尿病だけでなく、他の分野でも講師を外部から招いて行っている。こうした機会創出も同院が地域に根差している大きな理由だ。「地域を支えるのは地域住民と地域の医療関係者なのです。地域医療の質の向上は地域全体で取り組まなければ…」と坂本院長。

「白兎勉強会」の名前の由来は、彼の「因幡の白兎」に因む。神話「因幡の白兎」は、大国主命が傷ついたうさぎを助ける物語で、『古事記』に登場し、医療についての最初の記述だそうだがということが、同院ホームページのコラム欄に載っている。この物語の具現化こそが垣田病院の“ベクトル”である。